「平和の火」

プールにキャンプにと今年もチープな夏を子ども達と堪能した高野です。皆さんも遊び疲れて夏バテを引きずってませんか？
そんな楽しい夏の一番の思い出は？と聞かれると星野村の「平和の火」でしょうか。

星野村キャンプ場での夕食時、息子が地図を見ながら、「お父さーん、平和の塔って何ぃ～？」って聞いてきました。「知らん、何やろ？。明日行ってみよ。」

行ってみると、そこは山間の広場に三角形の記念碑があるだけ。それが平和の塔で、そのてっぺんに火が灯っています。それを「平和の火」というのだそうです。私は
その由来をネットで調べて愕然としました。

その火は星野村出身の山本達雄さんが、原爆投下後の広島から持ち帰ったもので、それが今も燃え続けているのです。

１９４５年、兵士として広島に入った山本さんは、市内で書店を営む叔父さんの安否を心配しました。この叔父さんはかつて、幼くして父親を亡くした山本さんを我が子同様に育ててくれた人です。結局、叔父さんは見つからず、山本さんは書店に立ちすくみ、まだくすぶり続ける火を見つめながら、「せめてこの残り火を、叔父さんの遺骨代わりに持って帰ろう」と決意します。
お守り代わりに持ち歩いていたカイロにその火を移し、星野村まで大切に持ち帰りました。その火は仏壇や火鉢に移され、20 年以上もの間、山本家でひっそりと守られていたのだそうです。

戦後２０年以上の月日が流れた１９６６年のある日。夏も近いというのに、まだ家族がこたつに火を入れているのを、その時たまたまお茶の取材で山本さん宅を訪れていた新聞記者が不審に思って尋ねます。そして戦争の話をきっかけに、山本さんはその記者に対し、その火の経緯を話したといいます。これが「平和の火」が初めて世に知られるキッカケでした。

当初は「恨みの火」「復讐の火」として火鉢やこたつにひそかに保存していたそうです。また一時は苦しい胸中の思いを晴らすため、ハワイ上空で火を消そうと考えたこともあったそうです。
しかし「報復では永久に平和は来ない」と考えを改め、1968 年、星野村役場に提供します。以来、村が「平和の火」として保存しているのだそうです。

ロシアがワチャワチャやってても、どこかピンとこない平和ボケの私。
でも星野村で燃え続けるこの原爆の火の存在を知ると、こんな私でも平和の尊さを実感します。
戦争なんて想像も出来ない美しい山里だからこそ、この火は本当に大切なものを教えてくれます。
平和を祈って、火を遺し続けた山本さんの遺志を繋いでいかなければなりません。